

詩時評

第17回

抒情とは
黙すること

松本衆司

水出みどり詩集『泰子』（思潮社）を読む。
「ひとつの声」を引く。

ひとつの声が消えた／つみこむように
やわらかな／その声／しだいに あなた
の言葉は／毀れた玩具にも似て／組み立
てられなくなった／バラバラになった言葉
の／なんと鮮やかだったことだろう／ひた
すら耳を開いて／あなたは／散乱する記憶
を聴いていた／ひとつの声が消えた／
真昼を／音のない川が流れる／ゆたかに深
さを増してゆく／透明な水が／あなたに
／言い得なかつた言葉のまわりに／やさし
く泡立ち／唇のかたちを象る／うすい耳が
／花びら／のように／流れてゆく

静謐な雰囲気を湛えた短い詩が並ぶ良質な詩集である。抒情とはかくのごとく黙することではなかつたか。それが、小林秀雄が言うように、理解のむこうにある実在への知覚である。

「リリックジャングル」二十六号を読む。多くの詩人や未来詩人たちの詩が並ぶ。その中から、霞さきこの「くずかご」を引く。

くずかごのなかに／すてられたことばがひとつ／わたしはそれを／そっとひろう／くずかごのなかに／かわいたなみだがひとつ／わたしはそれを／そとなげる／くずかごのなかに／あふれたおもいがひとつ／わたしはそれを／そとつむ／きづかないふりをした／月の光でふたをした／あまい蜂蜜を舐めた／その指先を／夜空のいろで染めた／くずかごのなかに／あきらめた／あなたがひとり／わたしはそれを／みつめている

「一九九七年生まれ、しし座の女。ポップでしなやかで愛に溢れた人間になりたいです。坂口安吾と星野源さんがとても好きです。」この小さな自己紹介文も詩と同様に素直で好感がもてる。このような若い詩人たちが自らの目と心で詩や人生と向き合って「ひとつの

人生」を育てていつてほしい、と願う。

優れた詩人の集う詩誌『孔雀船』も九十五号を数える。主宰する望月苑巳の有形無形の努力がしのばれる。船越素子「秋霖の人」を引く。

雨のなか／奈良公園を歩いている／胸の奥にちいさなほけが／棲みついたから／重くはない／辛くはないが／楽しくも嬉しくもない／ただ 軀のなかを風が往来する／またいつか／とあなたにいわれたのは／いつだったのか／いつかとはいつ／いいつる距離が／口惜しいばかりで／餌をねだる鹿一頭／寄りつかないのだった／そんなに絶りつきたかった／小指ですうっと／涙をひくようにうすく／それに 国宝堂の富楼那は／少年のように荒野にたつ／このさきへ行くしかない／そのさきの冥さは灯しようもないと／風が頬にちかい／それは約束だろうか／たがわぬ証だろうか／濡れながらあるくのを見かねて／五部浄も沙羯羅も阿修羅まで／駆けよつてくる／胸はおもく／視界はおぼろに／透きとおつた身体を／あなたが駆けぬけていく

詩のすべての言葉が第一連にある「胸の奥にちいさなほけ」に収斂していく。命の営

みとしての恋のありかがこの言葉に収斂して
いくように。

江口節が主宰する詩誌『鶴鶴』十三号を讀
む。田中章子の二篇はともに弟に寄せる詩だ。
「歓声の中に」を引く。

二〇一〇年二月／弟と癌との戦いに／ノ
サイドのホイッスルが鳴った／上背はそ
れほどないが／胸板の厚い弟のポジション
は／フォワードの二列目／左ロック 背番
号四／癌を相手にスクラムを組み／懸命
に押し続けた／それは見事な攻めだった／
諦めない姿勢を貫いた／それでも試合は
負けて／すべて静かに終わった／五十五年
の生涯だった／二〇一九年／自国開催の
ラグビーワールドカップ／弟はどこで観戦
しただろうか／もう空を自由に飛び回れ
るから／どの試合もあますことなく／楽し
んだことだろう／人々の歓声の中に弟の声
が／確かに聞こえた

多くの人が昨年のラグビーワールドカップ
に熱中した。その中に弟がいるはず。同様の
思いを抱いた人は少なくないかもしれない。
書評を書くこの私もその一人だ。その思いの
運びが、素直で洒落ていて好感を抱いた。

「乾河」八七号を讀む。林堂一の抜けた詩誌
はどこか寂しい。砂東かさね「夜明け前」を
引く。

ひと眠りしても／食べきれない余白がここ
にある／瞬きのあいまに／腕の中で膨れあ
がり／部屋がうめつくされていくのを／見
ていた／悲しみはひとりでに寝ころぶ／ひ
たひたの胸に広がる／さざなみ／最初の
波紋は／涙をこぼすまぶたよりもやさしく
／何もなかった頃の／再現に辿りつくさき
／私はいつも待ち切れなくて／埋もれてし
まう／窓の外があかるくなり／静かに仰
け反るとき／吐き出す息とおなじ速度で／
消えてゆくものがあつた

生きる時間の狭間に人生の記憶が潜んでい
る。齢を重ねるなかで、それは一層のことな
のだろう。理屈ではないそのことを、詩で書
く。読み手に満ちていくものがある。

『アルケ』二十一号を讀む。同封の「アル
ケ」通信第二十一号」の冒頭に井野口慧子さ
ん追悼の記事。驚きのなかでその紙面を読み
進める。また、ひとり大切な詩人が逝かれた
謹んで哀悼の意を表し、二十一号に掲載され
遺作となつてしまった二篇の詩より「ガラス
の家」を引く。

明け方の 木漏れ日から／鳥の囀りだけが
届いてくる／水縹の空が／白いカーテンに
溶けてみえる／私は横たわっている／永遠
の家と呼ばれた／あのエジプトの石籬／の
ような静けさの中／わたしたちはいつも
家に帰る途中なのです／ポイソプラノが
聴こえてくる／彼らはどこか遠くに呼ばれ
て／いるのだろうか／息子たちは 少年の頃
／ひとりで 歌つたことはあつたのだから
か／不覚にも彼らの歌声の記憶がない／振
り返れば／取り返しのつかないことばかり
／それぞれの星々からやって来た息子たち
／三歳まででに一生分の恩返しをするという
／彼らの帰る家を 知ることはないのだろ
うか／家は 潜伏している傷を抱き込み
／洪水の日々の 影を落としているが／少
しずつ風に晒されていく／眩しい一瞬の落
暉の後も／わたしの血を廻り続ける／透明
な青い炎を 消さないように／私もここか
ら帰っていきだろう／光のカタチをしたガ
ラスの家まで

たしかな手触りの抒情といえはいいのか。
生きることの真実を追い求める哀切な詩情と
いえはいいのか。井野口慧子の世界を味わう。

「鯨々」二号より中原秀雪「窓」を引く。

知り合いから／窓をもらった／贈物である
／据え付ける場所もなく／開くこともでき
ないので／納屋においてある／だから／そ
こに映るものは／青空でも／縹雲でもない
／湿った時間と／だまりこんだ時間／とき
に蜘蛛の巣／使いみちがわからないので
／息をはきかけて／みがいているが／すぐ
／無表情の静物にもどつてしまう／隠れ家
にも飾りにもならない窓／ただかつてそ
で生きた人の／無数の傷痕が刻まれていて
／雨や風や光や／呼びあった声が／かすか
な記憶として／におつてくる／捨てられた
交流の／玩具のようなこの木枠を／巨大な
画布にして／岬の突端から見える海のしぶ
き／問いかけてもいい／消しゴムで消し
きれない／スケッチのなかの／つぎつぎと
涌く雲のように／なし崩しのまま／ぼくは
／風に／晒されている

秀逸な詩だ。命の営みのむこうに潜む過去からの沈黙が滲むように伝わってくる。同じ誌面に載る中原の「荒川洋治ノート 大衆文化と文体の革新」は、荒川洋治の仕事で大衆という言葉に引き寄せて適切に捉えた「ノート」である。かつて荒川が大衆週刊誌「アサヒ芸能」の風俗レポの仕事で、大阪編に私は

登場している。お互い若かった。懐かしい思い出が少し甦った。

三上真知と宮内淳子のはがきサイズの二人誌「天飛」第三十九号を読む。タイトルは「あまとぶ」と読む。それぞれが詩とエッセイを担当している。三上真知の詩を引く。

なんでわてはこの歳なつてまで／こないな
事せなあきまへんのや／堪忍しとくれやす
いなせておくれやす／恋しくば尋ね来て
みよ和泉なる／信太の森のうらみ葛の葉
／葛の葉はんに化けてた／おなごの白い狐
が／ぼんを置いて森へいんでしもたんや
敏子はんも／どこぞへうなつてしもうた
さかい／こいなめにわてがおうてまんねん
やでえ／しばらく居てくれた祖母が帰っ
てしまった。泣いてばかりいた私に手をや
き父は喜寿も過ぎた祖母に無理を頼んだの
だが、孫三人の子守やおさんどんのような
日々に音をあげ、七日もしないうちに退散
してしまった。／あの頃、道はほとんどの
舗装されておらず、たまに破れた水道管の
水が漏れ出し、ほそい湧き水のように砂を
躍らせていた。／ぶくぶく見につれつて
え／夜が白みはじめると祖母に耳打ちし
て、ほとんど毎朝のようにヲサワ工業の栢
植の生垣が途切れる辺りまで連れて行って

もらった。尾をたらしした野良犬が餌をあさりうろろし、肩を斜めにした少年が新聞をせわしく配っていた。／今日はぶくぶく見えるかなあ／こまやかな砂でできた／白い水たまり／真ん中から／ぶくぶくぶく／砂が／いく筋か湧きだし／フーガ／見えない小さな穴がふるえている／ぽつと、あぶくが生まれる／ぶくぶく／濁らない／水／透きとおった／まま／／そおと、あぶくが消える／（略）／何度も読み返したアンゼルセンの『にんぎょうひめ』／あぶくが生まれる／ほんの／ほんの少し前／人魚は／死ぬ／だから／そのもう／泡が／生まれそうな／処に／人魚は／居るにちがいない／／ここよ／声をなくした人魚の呼びかけ／私には／聞こえない／／ずっと／見つめていた／しじま……／／ぬれますさかいにおいどあんじょうしなはれ／しゃがみつけ／私は／真ん中から／ぼうおと／瑠璃が／にじみだすまで／帰りました／／／恋しくば尋ね来てみよ和泉なる／信太の森のうらみ葛の葉

まず、登場する祖母の大阪弁の雰囲気魅せられる。これも今はない世界。「葛の葉」伝説、「人形姫」のお話、そして昭和三十年代の風景が重層しながら、母のいない幼

い少女の無垢な世界が描かれる。幼子のころが迫ってくる三上真知の佳作である。

樋口武二詩集『雨の部屋』（詩的现代叢書）を読む。「旅先の安宿であらわな風景を、」から一部（二・三連）を引く。

長い旅の途上で、いつしか自らの記憶に帰ることを、（旅をする）、と呼ぶようになった。だがそれが、いつからのことであつたのかは、もう、いまとなつては思ひだせない。いまだ（あの人に逢えるだろう）という自信に似た感情だけが私の行為の源であり、けつきよは病み疲れて、自らの在所へと帰郷するはめにもなつてしまつた。あるいはそれが、ひとつの目的であつたのかもしれないが、などと、そんな気持ちにもなつてしまふのだが、それも、たんなる感傷か、言い訳に過ぎないものだ。いや、旅をしていた、ということじたいが、たんなる私の妄想にすぎず、自らの記憶の中を彷徨い歩いていただけのことだつたのかも知れない。だから私は、記憶に起居している寂しい人間ということにもなるのだ。／＼やはり、旅から帰つた、と思つたのは大きな間違いで、どうやら私は、まだ旅の途上にあるらしい。いやむしろ、記憶を歩いていく、といつてもいいのか。たぶん、この美

しい情景は、何者かが見せているたんなる幻にすぎないものであろうか。あるいは、私の辛い思いや記憶の数々が、冷たい雨に打たれたあげくに、このようなものを見せられてしまつていくのかもしれないと、そんな考えにもいきつくのだ。そうした事がらを記憶のなかの人に尋ねれば、虚か、現実かなんてことは考えても仕方がないの、と一蹴されてしまつた。その答えに呑まれて、おもわず顔をあげると、見なれた暮らしの情景が、朝もやの中で寂しく立ち竦んでいた。

起こつていた。路地の突きあたりにあつた、橋本さんの家を始め、小宮さんや久保田さんの古い家並みが根こそぎ姿を消していた。岩城さんのお屋敷の数百坪の広大な庭に続いてはたはずの土地は、天変地異の跡のように踏みじられ、むきだしとなり、数百メートル先のアパートの建物が残つていばかりだつた。ここに太い道路を通すということが、それが完成を見るのはいつのことなのか、今はただ、立入禁止の鉄の標識が陽を浴びているばかりである。／私は驚きを隠せなかつた。悪い夢のようだつた。

雨の雫がぼたりぼたりと落ち続けるように、人の心に滴りつづける体験の記憶がある。詩人樋口武二は、その記憶に帰ることを「旅をする」と呼ぶ。多くの老人たちは皆無表情の日常を生きているが、彼らは記憶の旅人なのだ、と、この詩集を読んで改めて考えさせられた。

心の声に耳を傾けるひとときを持つことが、慌しい日常に流されない、苛立たしい現実や無機的な空気に押し潰されない唯一の方法かもしれない。全篇、心の中の対話のような温もりがある。引用の箇所は、あらゆる場所では人々が経験する悲しい風景である。「時空がねじれ、切断され、見えないものたちが哭いている」、詩をなくした現代に、今一度、唯一の方法を思い起こしたい。

浅山泰美の随筆集『京都夢見るラビリンス』（コールサク社）を読む。「花明かり京の都の朧夜に 誰と旅せむ夢みる迷宮」和歌と散文の心地よい調べにみちびかれながら「月暈の果て」より部分を引く。

十一月半ばの小春日和の日だつた。中川さん案内して訪れた故旧の地、左京区岡崎東福ノ川町の袋小路の奥に、大きな異変が